メインシナリオ／サイド第２回
『滅びを望む者たち　第２話』個別リアクション

『契約』

　メリッサ・ガードナーがレイザ・インダーと取引をして、約１カ月が経った。
　メリッサはその日、報告と魔法学校生を迎えに、魔法学校を訪れていた。
「レイザくん、契約書にサインしてよー！」
　魔法学校の応接室にて、メリッサは報告書と２枚の契約書をレイザに差し出した。
『お前が俺の為に働くのなら、マテオ・テーペ登頂に協力する』
　レイザのその言葉に従い、メリッサは彼の指示通り水泳のコーチと、温水プール、露天風呂の管理に努めている。
「まだレイザくん好みの娘、見つけられてないけど、私ちゃんと仕事してるよね？　だから、サイン、サインー」
　メリッサがしつこく求めているのは、彼女が作った契約書へのサインだ。
「いらないだろ、契約書なんて。お前がその気になったら、いつでも付き合ってやる」
「でもレイザくんいっつも忙しそうじゃない。毎回同行は無理でしょ？　怪しまれても外国人独りじゃ信用ないし、後ろ盾があるって証明に持ってたいの」
「同行（かんし）していない時の責任までとれるか。俺だってまだお前を信用していない。登山ルートで我慢しておけ。それなら１度で済む」
「登山道じゃ意味ないの、ク　ラ　イ　ミ　ン　グ　！」
　メリッサがしつこくサインをせがむと、しぶしぶというようにレイザは契約書の内容を確認して『協力は同行時のみ。仕事の内容は他言無用。漏らした時点で契約は無効』と付け加えると、契約書２枚にサインをした。それから、２枚を少しずらして置いて２枚にまたがるよう、互いにサインをして完成させた。
「ありがと、お守りにするね♪」
　片方を大切に折りたたんで、メリッサは懐の中にしまった。
　レイザは報告書に視線を移し、メリッサのチェックとコメントを確認していく。
　約１カ月間で、数百人の女性とメリッサはプールや露天風呂に入った。
　彼がメリッサに依頼したのは、より多くの女性と温泉を利用すること、そして……。
『体に細長い蛇のような痣のある女性を見つけ出せ』
　といった指示だった。
　報告書には、一通り確認をした女性の名前にチェックを入れ、痣のようなものがあった女性については、痣の形や色についてコメントを記してあった。
　わかる範囲で魔法の属性、出身なんかも記入してある。
「……該当者なしか。ご苦労」
　一通り目を通し、レイザはため息をついた。
「ねぇところで、この国はいつ独立したんだっけ？　伯爵さんが領主になったのはその頃？」
　仕事のこともそうだが、この１カ月間気になっていたことを、メリッサはレイザに尋ねてみる。
「なんだまた唐突に」
　訝しげな顔をするレイザ。
「そもそもインダーさんちは貴族なの？　私の知ってる貴族は政略婚とか降嫁とか、なかなかドロッとしてたけど……ここもそう？」
「政略結婚や降嫁のどこがドロッとしてるんだ。王侯貴族にとっては普通の事だ、そうやって力を得て民を護っているんだから」
「あ、レイザくんもしかして、許嫁とかいる？　やっぱり貴族なんだ……」
　なんだかちょっと複雑な気持ちになりながら、メリッサは続ける。
「ねぇ、もっと教えて。私、他国の史実なんてわからなくて。まぁ自分の国のもわかってないけど。アホ女だから」
　そして、隣に座るレイザを肘でつっつく。
「教えてよ、せんせー」
「俺はお前の先生じゃない。歴史は専門外だ」
「レイザくんの家のことは、レイザくんしか知らないでしょ。詳しく知りたくなったのよ。なんでかな？」
　メリッサはレイザの目をじっと見つめた。
「……レイザくんのことが、知りたくなった……の、かな」
「何故？」
　レイザは見定めるかのような目でメリッサを見ていた。
「えっと、だってほら……上司を理解するの、大事でしょ！」
　軽く慌てながらメリッサは言う。
　自分でも上手く言葉にできない。だけれど、なんというかレイザに惹かれるものがあった。
「……なるほど、アシルさんから俺に乗り換えたか。俺を誘惑して懐柔し、意のままに操ろうとする真の狙いはなんだ」
　言いながら、レイザは最後の方は笑っていた。

「俺には権力も自由もないぞ」
「もう、そういうんじゃないって！　今度はホントに、マテオ・テーペも関係なく、知りたくなったの」
　ぷっくり膨れたメリッサを、レイザは可笑しそうに眺めている。
「コーンウォリス公国がウォテュラ王国から独立したのは５０年前。その時、アシル・メイユール伯爵がこの地の領主となった」
「そうなんだ、５０年も伯爵さんここを治めてるんだ……って、ちょっと待って、伯爵さんってどうみても３０代だよね。レイザくん、今適当なこと言ったでしょ！？」
「あ、わかったか」
　笑いながら、レイザは続ける。
「その時の領主はアシルさんの祖父……俺の曽祖父だ。
　その曽祖父の長女が俺の祖母で、アシルさんの父の姉で、伯母。そして俺の祖父のアゼム・インダーの妻。その娘はアシルさんと従姉弟で、俺の母」
「……ちょっとまって、頭が混乱してきた」
「わざと分かり難く言っている」
　レイザはくくっと笑みを浮かべている。
　からかわれているらしい……が、悪い気はしなかった。
「無論、うちと伯爵家との縁は政略結婚だ。俺の両親も政略結婚だし、俺にも許嫁とされた女性がいた」
「いたってことは、今はいないの？」
「今はいない」
　避難したのか、水に飲まれてしまったのか……。
　さすがにそれ以上詳しくは聞けなかった。
「っと、そろそろ迎えの時間だ。
　お前の真の狙いは良く分からないが、引き続きよろしくな。悪いようにはしないから」
　レイザは立ち上がり、メリッサの肩に手をぽんと置いて戻っていった。

こちらのリアクションは以下の人物に発行されています。
メリッサ・ガードナー